ラカン協会第 18 会大会シンポジウム

ポスト〈68 年 5 月〉のファルスと女性的なるもの

提題：春木奈美子（京都大学）×佐藤朋子（金沢大学）

コメンテータ：花田里欧子（東京女子大学）

司会：立木康介（京都大学）

「〈68 年 5 月〉の権利要求が向けられたのは、学生・労働者間のリンクや、性の自由、若者の解放、そして権威の批判にであって、女性たちをめぐる問いにではなかった。フェミニストたちは、たしかに、ソルボンヌの講堂で集会を組織した。だが、それはまだ政治的インパクトをもつ公的な出来事たりえていなかった。」

そう証言するのは、1980 年代からフェミニスト思想の系譜学的研究と認識論的鋳直しに取り組み、90 年代末から 2000 年代初頭にかけては欧州議会議員も務めた哲学者ジュヌヴィエーヴ・フレースだ（*Le Monde*, Hors-série, *68 Les jours qui ébranlèrent la France*）。68 年 5 月、パリの学生たちの集会にて、カトリーヌ・クレマンやエリザベート・フォントネをはじめとする、当時すでに注目を集めていた若き女性知識人たちの演説に感銘を受けたフレースは、しかし、こうした女性たちの言説が、〈5 月〉の段階ではまだ公的な発言とはみなされていなかったこと、

当時の趨勢は女性たちをなお家庭に送り返す方向に傾いていたこと、それゆえ、女性の解放というスローガンが社会的な力を持つのは 1970 年代になってからであったことを指摘せずにおかない。そう、〈68 年 5 月〉は、「女たち」についての問いが公論の地平に浮かび上がるきっかけにすぎなかった。いや、おそらくその短い「助走」だったのだ。

だが、まさにその 1970 年代、女たちをめぐる議論は目に見えてかたちを変えてゆく――精神分析の内と外で。私たちに馴染みがあるのは、いうまでもなく「内」のほうの事情だ。〈68 年 5 月〉後にラカンの理論に起きたのは、ひとことでいえば、女性のセクシュアリティをファルスへの準拠から解き放つことだった。これは、1/ 男と女の存在を規定するフィールドを欲望の地平から享楽のそれへと切り替えること、そして、2/ いまやひとつの「論理関数」と定義し直される「ファルス」への「否定」を導入すること、という二重の変更をとおして、また同時に、「性関係はない」という名高いテーゼの肉付けと一体をなす形で、進められた。そこでは、女性とその享楽はいかなる論理のもとに位置づけ直されるのだろうか。ラカンによるこの再定義は、女性たちが精神分析の「外」に巻き起こす運動と、いかに呼応していたのだろうか。

〈68 年 5 月〉の 50 周年を記念するラカン協会のチクルスを、いま旬を迎えつ

つある三人の研究者・臨床家との討議によって締めくくる。（立木康介）

提題概要

春木奈美子：彼岸の女たち――ラカンの女性論に寄せて

1960 年、アムステルダムで開催された「女性の性」と題された会議で、フランソワーズ・ドルトが行った発表に対し、ラカンは「よくも（厚かましくも）言ってくれた pour parler comme tu parles, tu es culotée」という不可思議な「賛辞」で同意を表したという（F. Dolto, *Sexualité féminine,* p. 46）。この反響が、ラカンの中で「性関係はない」というあの有名なテーゼとして結晶化することになるのは、それから 10 年近く後の、1969 年のことである。

今回の発表では、50 年代のラカンのファリシズムから 70 年代の女性論までを、つまり「ファルスである être」女性の欲望のポジションから「すべてではない pas-tout」女性の享楽までを、『三田文学』での立木氏の連載「ラカンと女たち」を参照しながら見渡しつつ、68 年 5 月後のラカン理論の潮流、「4 つのディスクール」から「性別の論理式」、そして「ボロメオの結び」と続く流れの中に現れる女性の享楽について、症例や文学を素材にしながら、できる限り迫ってみたい。

佐藤朋子：〈精神分析と政治〉による「ポスト 68 年 5 月」

〈精神分析と政治〉(Psychanalyse et politique、通称 Psychépo)は、フランスの女性解放運動（MLF）の中心的人物の一人であったアントワネット・フークがヴァンセンヌ大学で 1970 年代初めに行ったセミネールの呼び名である。フークが同じ名のもと MLF 内に組織したグループは、パリ・フロイト学派と距離を置きつつも、他方で同学派の重鎮セルジュ・ルクレールと協力関係を結び、フロイトやラカンのテクストの読解を通じて自己定義を図りながら活動を展開した。後年のその総括によれば、1968 年 5 月に起きたのは、父権制の見かけの崩壊と息子権制（filiarcat）の現出であり、同時に、打倒の身振りにおいて一致する息子たちの紐帯としての兄弟愛から排除される「女性」の可視化である。そして、女性の発言を契機として進展する社会の民主化について、フークの仕事は、『二つの性がある』（1995 年）とそれに続くフェミノロジー試論の連作の発表にいたるまでの長年にわたり、理論的な支柱を提供してきたのである。本発表では、〈精神分析と政治〉が以上のように語る歴史を再検討し、言説の中心に位置するリビドーの二元論を明確にするとともに、その二元論に期待された変革の力について強度と持続性、普遍性の観点から検証を試みる。